

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくり
～豊かなスポーツライフにつなげる体育指導の実践を通して～

宮崎県立都城きりしま支援学校
教諭 市來 洋

目 次

I	研究主題	4-1
II	主題設定の理由	4-1
III	研究目標	4-1
IV	研究仮説	4-1
V	研究内容	4-2
VI	研究計画	4-2
VII	研究構想	4-3
VIII	研究の実際	4-3
1	理論研究	4-3
(1)	知的障がい教育における個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した授業づくり	4-3
(2)	個別の教育支援計画及び個別の指導計画と豊かなスポーツライフとの関連性	4-7
(3)	県内の知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校を対象としたアンケート調査	4-8
2	実践研究	4-9
(1)	個別の教育支援計画及び個別の指導計画と教科会を活用した授業づくり	4-9
(2)	検証1	4-10
(3)	検証2	4-13
3	結果	4-16
4	考察	4-18
IX	研究の成果と今後の課題	4-20
	参考・引用文献	4-20

I 研究主題

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくり
～豊かなスポーツライフにつなげる体育指導の実践を通して～

II 主題設定の理由

2018年3月に策定された障害者基本計画(第4次)では、障がいのある方が生涯を通じて教育やスポーツ、文化等の様々な機会に親しむための施策を推進するとともに、共生社会の実現を目指している。また、小・中学部、高等部特別支援学校学習指導要領(平成29、30年告示)において、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図るという観点から、新たに生涯学習への意欲の向上や、生涯を通じてスポーツや文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるように配慮することが求められている。

そのため、特別支援教育においては、長期的な視点で幼児期から学校卒業後までを通じた切れ目のない支援を行うための個別の教育支援計画を作成し、活用することが重要となる。また、小・中・高等学校及び特別支援学校学習指導要領解説では、個別の教育支援計画と個別の指導計画との関係について、作成する目的等に留意しつつ相互の関連性を図り、学習を展開することが求められている。

しかし、先行研究によると、窪田ら(2016年)は、「個別の指導計画で作成した指導目標と授業の目標が関連付いていない」ことを指摘し、個別の教育支援計画及び個別の指導計画を授業での活用のために必要なこととして「効率的な打合せ」が重要であると述べている。また、佐々木ら(2016年)は、個別の指導計画の活用について、「活用のための実質的手立てとそのプロセスはこれまで担当教師の任意に委ねられ、その手立ても非公式・非定型であり、不透明さがある。」と指摘している。さらに、一木ら(2010年)によると、特別支援学校では、前年度の目標や評価の背景、根拠が把握できずに次の目標の方向性が見えないために前年度を踏襲した指導に陥りやすいことを述べている。

そこで、本研究では、将来を見据えた教育活動の充実を図る観点から、個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくりについて研究を深めていく。授業の計画段階から、個別の教育支援計画と個別の指導計画に記載されている目標や内容を盛り込み検討する。その検討の場としては、授業の打合せをする既存の教科会を用いる。また、障害者基本計画(第4次)では、東京2020オリンピック・パラリンピックを共生社会へ向けての一つの契機として捉えており、障がい者のスポーツの裾野の拡大に向けた取組を推進していることや、みやざき特別支援教育推進プラン改訂版(宮崎県教育委員会:2018年)において、スポーツ等を通じた「生きがいくくり」を在学中から計画的に取り組む必要性が示されていることから、体育指導での実践を通して検証を行う。

本研究を通して、将来を見据えた授業が展開されるための個別の教育支援計画及び個別の指導計画の活用の仕方や授業実施までのモデルとなる教科会の在り方を提示することができ、みやざき特別支援教育推進プランの実現にもつながると考え、本主題を設定した。

III 研究目標

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくりの在り方を明らかにする。

IV 研究仮説

個別の教育支援計画及び個別の指導計画と体育の授業づくりが関連した教科会の在り方を明確にすることで、個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくりができるのではないか。

V 研究内容

1 理論研究

(1) 知的障がい教育における個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した授業づくり

- ア 知的障がい教育における教育課程の構造と特徴
- イ 個別の教育支援計画と個別の指導計画の意義
- ウ 個別の教育支援計画と個別の指導計画の活用
- エ 個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した教科会

(2) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画と豊かなスポーツライフとの関連性

(3) 県内の知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校を対象としたアンケート調査

2 実践研究

(1) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画と教科会を活用した授業づくり

(2) 検証 1

- ア 教科会の実践
- イ 検証授業の実践

(3) 検証 2

- ア 教科会の実践
- イ 検証授業の実践

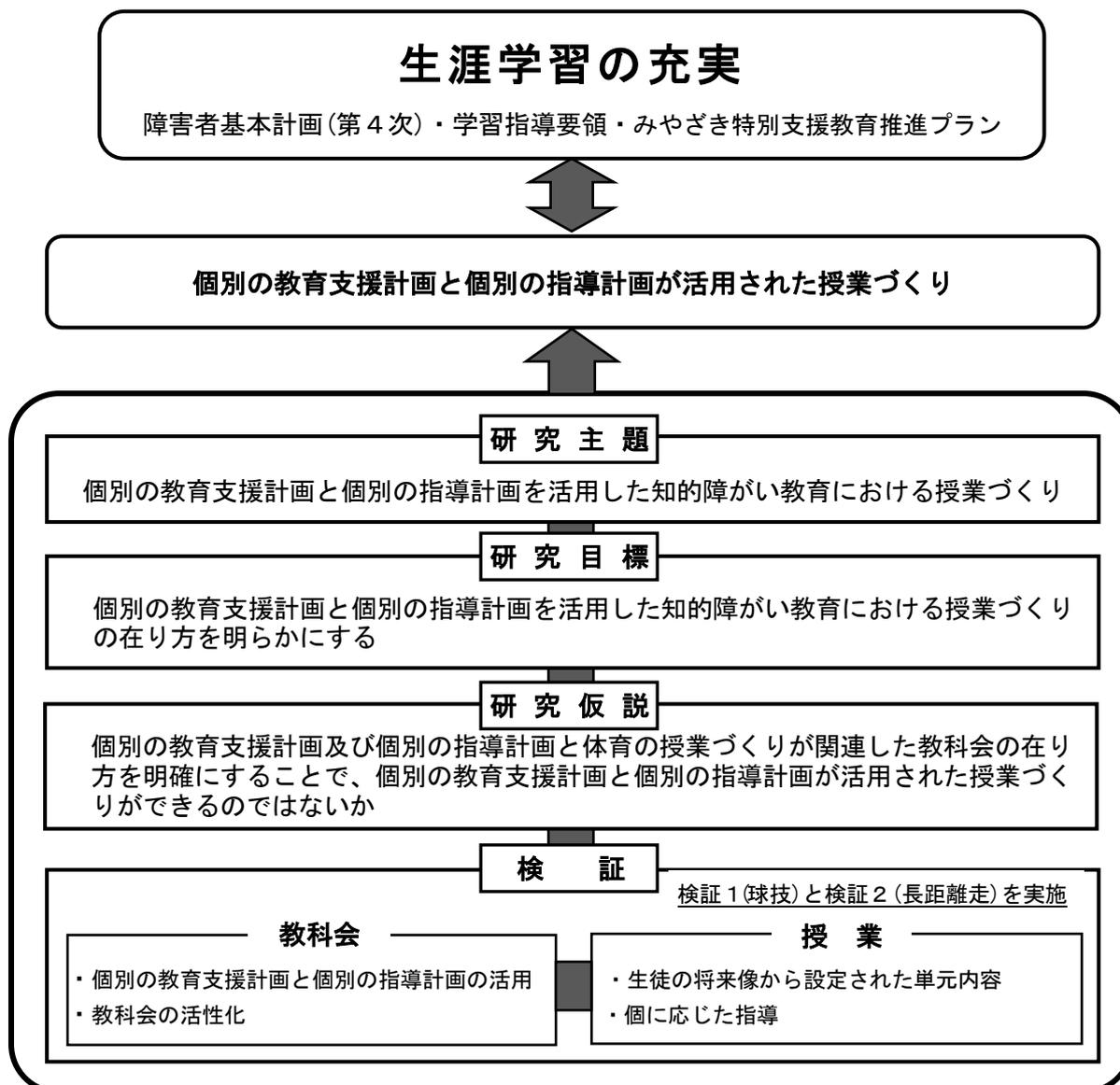
3 結果

4 考察

VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・仮説等の設定	文献研究
5	○研究の方向性 ○理論研究	○研究内容・研究計画の設定 ○参考文献・先行研究の収集 ○アンケート調査の項目整理	文献研究
6	○理論研究 ○教科会の構想	○理論の構築 ○文献研究 ○前期協議会の資料・プレゼン作成	文献研究
7	○前期協議会 ○実態調査 ○教科会の準備	○教科会の検証の内容検討・資料準備 ○アンケート調査 (実態調査・事前調査)	文献研究 アンケート調査
8	○教科会の実践 ○検証授業の準備 ○教科会の準備	○検証授業の学習指導案の内容検討・準備	文献研究 教科会の実践と評価
9	○検証授業の実践 ○教科会の実践	○検証授業の実施と検証Ⅰの分析 ○アンケート調査 (検証Ⅰ事後調査)	教科会・授業の実践と評価 アンケート調査
10	○検証授業の準備	○検証授業の学習指導案の内容検討・準備	実態調査
11	○検証授業の実践	○検証授業の実施と検証Ⅱの分析 ○後期協議会の資料作成 ○アンケート調査 (検証Ⅱ事後調査)	授業実践と評価 アンケート調査
12	○後期協議会	○後期協議会の資料・プレゼン作成	文献研究
1	○研究のまとめ	○研究報告書の作成	文献研究
2	○研究のまとめ	○研究発表会の資料・プレゼン作成 ○パネルの作成	文献研究
3	○研究発表会	○研究発表会の資料・プレゼン作成	

Ⅶ 研究構想



Ⅷ 研究の実際

1 理論研究

(1) 知的障がい教育における個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した授業づくり

ア 知的障がい教育における教育課程の構造と特徴

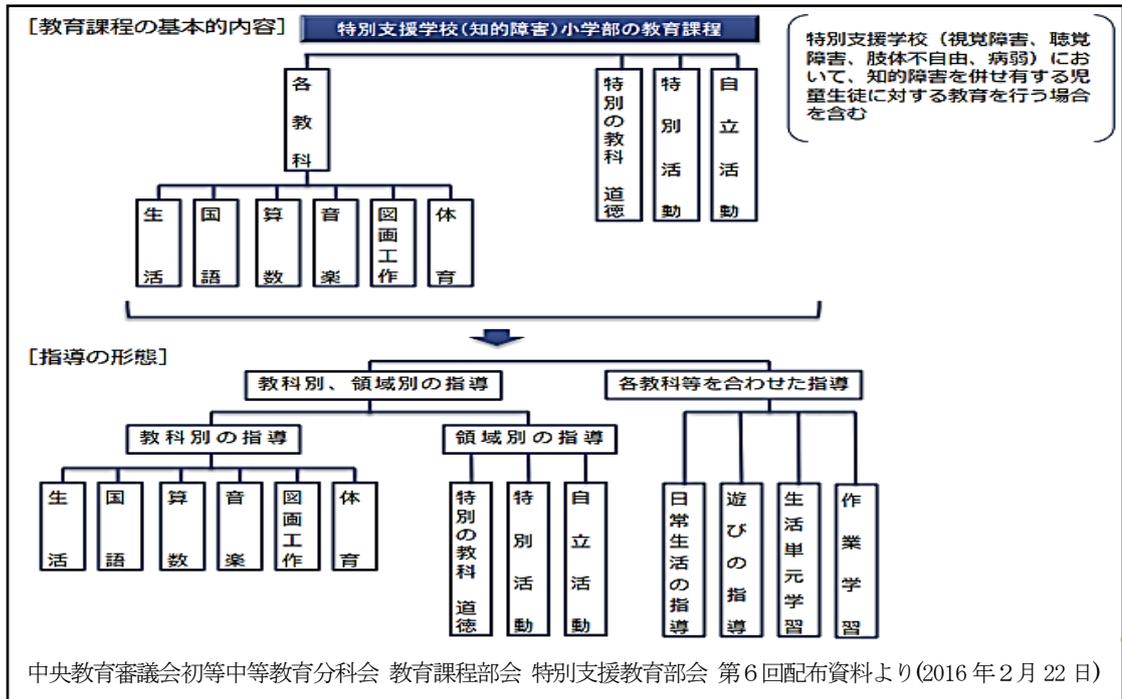
特別支援学校の教育課程は、幼稚園に準ずる領域、小学校、中学校及び高等学校に準ずる各教科、道徳、特別活動、総合的な学習（探究）の時間のほか、障がいに基づく種々の困難の改善・克服を目的とした領域である「自立活動」で編成されている。

知的障がい教育における教育課程については、法令等に基づき、【資料1】のとおり、児童生徒や学校・地域の実態に即して、各学校の教育目標を実現するために必要な教育内容を編成できるようになっている。

知的障がい教育における各教科等の目標や内容については、知的障がいの特徴や学習上の特性等を踏まえ、児童生徒が自立し社会参加するために必要な知識・技能、態度などを身に付けることを重視し示されている。平成29年の学習指導要領の改訂により、各教科等の目標や内容は、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理された。このことは、

障がいのある幼児児童生徒の学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園、小・中・高等学校との学びの連続性を重視している。

【資料 1】 知的障がいのある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校(小学部)の教育課程の構造



「各教科等を合わせた指導」とは、知的障がいのある児童生徒の障がいの状態等に即した指導を行うためのものであり、学校教育法施行規則第 130 条第 2 項には、「各教科、道徳、外国語活動、特別活動及び自立活動の全部又は一部について、合わせた授業を行うことができる。」とされている。

「教科別の指導」とは、時間割の中に、各教科の時間を設けて指導を行うことである。指導を行う教科やその授業時数の定め方は、対象となる児童生徒の実態により異なる。各教科の目標は、児童生徒の知的機能の障がいの状態と適応行動の困難性等を踏まえ、知的発達、身体発達、生活行動、社会性の発達の状態等を考慮して、学年別ではなく段階別に定めている。各段階の内容は、各段階の目標を達成するために、児童生徒の生活経験を基盤として知的能力や適応能力及び概念的な能力等を考慮し、配列されている。

教科別の指導における指導計画の作成に当たっては、一人一人の児童生徒の知的発達の段階や障がいの状態等に関する実態把握を行うとともに、興味・関心、学習状況、生活経験等を十分に考慮し、取扱う内容を個別的に選択・組織することが必要となる。また、学習活動に生活的なねらいをもたせ、児童生徒の実態に基づき、生活に即した活動を段階的に指導することが大切とされる。

イ 個別の教育支援計画と個別の指導計画の意義

「個別の教育支援計画」は、障がいのある幼児児童生徒を生涯にわたって支援する視点から、教育、医療、福祉等の関係機関の関係者及び保護者等が幼児児童生徒の障がいの状態等に関わる情報を共有化し、一人一人のニーズを把握して、教育的支援の目標や内容、関係者の役割分担などについて計画するものである。「個別の指導計画」は、一人一人の幼児児童生徒に対して効果的な指導を行うために教育課程を具現化したものであり、教科や

領域ごとに具体的な指導目標、内容・方法等を示したものである。

それぞれの様式については、文部科学省は複数の様式を例示しており、各学校の実態に応じて創意工夫し作成するものとなっている。個別の教育支援計画に盛り込まれる内容として、①本人・保護者のニーズ、②支援の目標、③支援の内容、④支援を行う関係者や関係機関、⑤支援の評価、引継内容等の項目が考えられる。個別の指導計画には、各学校等の教育課程を踏まえ、①実態把握の情報、②長期的目標、③短期的目標、④指導や支援の内容、方法、⑤評価の観点等が考えられる。【資料2】【資料3】は研究協力校である宮崎県立都城きりしま支援学校の様式である。

【資料2】研究協力校の個別の教育支援計画の様式の一部

個別の教育支援計画				
宮崎県立都城きりしま支援学校 中学部				
ふりがな 生徒名	男 女	生年月日	平成	年 月 日
※転入学 年月日	平成 年 月 日 中学部 年 入学・転入 () より			
住 所	〒 -			
自宅電話番号	☎ () -			
障が いの 状況	療育手帳	有・無	障がい名	判定 次回判定日
	身体障害者手帳	有・無	障がい名	種 級 次回判定日
	精神保健福祉手帳	有・無		級 次回判定日
	その他 診断名 疾病			
●保護者の願い等				
	現在の様子	保護者の願い (学校で特に指導してほしい事や配慮してほしい事など)		
ンケ 手 段 コ ニ シ ヨ ク	1年			
	2年			
	3年			
●各関係機関との連携				
	サービス内容	事業所名等	担当	頻度
福 祉 に 関 す る 支 援	○相談支援専門員 (有・無)			
	○放課後等デイサービス (有・無)			
	○行動援護 (有・無)			

【資料3】研究協力校の個別の指導計画の様式の一部

個別の指導計画 様式2
個別の指導計画Ⅱ (前・後) 期の目標・指導内容・指導方法とその評価<記入例>
【□期】 ○○ 学部 ○年 ○組 児童生徒氏名 (○○○○) ※目標達成度・・・◎達成、○継続、△修正が必要

1 教科等名	2 期の目標	3 具体的な指導内容	4 具体的な指導方法	5 評価	
				目標 達成度	評価の理由
日常生活の指導	①教師の支援を受け更衣ができる。(基本的生活習慣) →手帳表を使って更衣と衣服の整理が一人できる。(基本的生活習慣)	・簡単な衣服の着脱と衣服たたみ →教師と一緒に行う。 →写真カードや文字カードの手帳表を使って簡単な衣服の着脱と衣服たたみ一人で行う。	・衣服たたみは、教師が手を添えてたたみ方を教える。 →時間割を見て、着替えの有無を確認させる。 →どこで、どの順番で着替えるのかを示した写真入り手帳表を使って自主的な着替えを促す。 →写真カードが定着したら、ひらがなの手帳表に切り替える。	○	(前期例) ①写真カードを使っての衣服の整理はできるようになったが、ひらがなカードでの指示理解は難しかった。後期はひらがなに慣れを持たせる指導を重点的に行い、並行してひらがなカードによる自主的な活動を継続する。 (後期例) ①ひらがなカードを使っての行動が徐々にできつつあり、ひらがなへの関心が高まりつつある。文字カードを使っての自主的な活動を次年度も継続してほしい。
生活単元学習	①天候や季節に合わせた生活の仕方を理解し、実践する。(自然)	・春、梅雨、夏など季節の特徴を天候、草花、食べもの等で知る。 ・春を探そう、春の壁面飾りを作ろう、春の食べ物、傘をさして歩こう、夏の食べ物(カキ氷、そうめん) ・季節に合わせた生活の仕方を学び実践する。	・季節に咲く草花や季節の特徴を示したもので教室を飾る。 ・天気については、「お天気カード」で確認するが、雨の日は「カッパ・傘カード」も掲示する。 ・雨の日に傘を使うなどの体験を積みながら、生活上の必要な知識も確認する。	◎	(前期例) ①傘の使い方など、体験しながら確認する方法が効果的だった。

平成 29 年に告示された小・中学校の学習指導要領では、特別支援学級に在籍する児童生徒、通級による指導を受ける児童生徒についての個別の教育支援計画及び個別の指導計画（以下、個別の教育支援計画等）の作成が義務付けられ、効果的に活用することが示された。また、高等学校においても通級による指導を受ける生徒に同様の記述が示された。インクルーシブ教育システムの構築が進む中、個別の教育支援計画等の果たす役割は、今後ますます重要になることを示唆している。

ウ 個別の教育支援計画等の活用

障害者基本計画(第4次)の「9. 教育の振興」の中で、障がいのある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けて主体的な取組を支援するという視点に立ち、全ての学校において個別の教育支援計画等を活用して、適切な指導や必要な支援を受けられるようにすることが明示されている。

萩庭(2017年)は、計画を作成する上で、目の前の課題解決だけでなく、児童生徒及び保護者の願いや将来の希望を踏まえて作成すること、さらに、個別の教育支援計画等の意義を理解し、教員間の連携ツールとして活用することの大切さを示している。

しかし、窪田ら(2016年)が行った調査の結果、「個別教育計画で作成した指導目標と授業の目標が関連付いていない」等の現状があり、「日々の授業の中に個別教育計画を関連付け、授業を通して見直し修正していく仕組みを一層強化していくこと」を課題として示した。また、国立特別支援教育総合研究所の研究(2018年)において、特別支援学校(知的障がい)では、個別の指導計画を引継ぎとして活用しているものの、次年度の指導計画の立案の中に指導目標等を参考にしている学校は少ないことを明らかにしている。

このように、国の施策では、個別の教育支援計画等の活用を求められている一方、先行研究では共通理解や授業改善への十分な活用に至っていないなどの課題点が指摘されている。

エ 個別の教育支援計画等を活用した教科会

特別支援学校の授業の多くは、ティーム・ティーチング（以下、T・T）により展開されている。また、研究協力校における教科別の指導「体育」の時間については、学年での合同学習や同じ教育課程内の全学年合同での学習が実施されている。生徒の人数が増えることで、指導・支援に必要な教師の数も増える現状がある。

T・Tの効果を高めるためにも、授業づくりの各段階（授業計画の立案、必要な教材・教具の準備、指導の実施、評価と反省）から教師が協働で進め、授業や児童生徒の実態を共通理解しておくことは大切であると示している（静岡県総合教育センター）。

福山(2017年)によると、知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校におけるT・Tの課題として、「共通理解の困難性」を指摘しており、その原因として、「共通理解のための時間がとりにくい」ことを挙げている。

そこで、限られた時間で十分な共通理解を目指すため、【表1】に示す各県教育センターや各学校における授業研究会の進め方等を参考にしながら教科会の充実を図っていきたい。

【表1】各県教育センターや各学校における授業研究会の進め方等

* 表中のAは鹿児島大学教育学部附属特別支援学校、Bは富山大学人間発達科学部附属特別支援学校、Cは京都府総合教育センター、Dは岩手県立総合教育センター、Eは佐賀県教育センター、Fは静岡県総合教育センター、Gは栃木県総合教育センター、Hは山口県教育委員会を表す。

方法や役割	各府県センター等	具体的な例
充実した会にするために必要なこと	A	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が参加し、教師同士の学び合い（同僚性） ・授業づくりの視点の共有（共有性） ・進め方やルールが明確（機能性） ・効率的、継続的、効果的な会であること（効率性）
	D	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを共通確認 ・付箋紙のグループ化を焦らない ・協議の焦点化 ・結論を一つと決めない
	F	<ul style="list-style-type: none"> ・共通理解の場 ・合意形成を図るためのコミュニケーション
	G	<ul style="list-style-type: none"> ・場のデザイン ・ゴールの明確化 ・ルールの確立
具体的な方法	A	<ul style="list-style-type: none"> ・VTRを視聴 ・付箋に記入 ・付箋を基にした発表
	B	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師を招聘 ・授業改善シートの活用 ・付箋の活用 ・記録に黒板を活用 ・ビデオによる確認
	C	<ul style="list-style-type: none"> ・小グループ ・ブレインストーミング ・カード構造化法 ・付箋の活用 ・KJ法 ・ビデオの活用 ・フリーカード法
	D	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋紙 ・ワークシート ・移動式黒板 ・概念化シート ・ホワイトボード
	E	<ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイク ・指導案拡大法 ・ブレインライティング ・マトリックス図 ・KJ法 ・ファシリテーション ・ブレインストーミング ・マトリックス法 ・ワールドカフェ ・5W1H ・映像の活用 ・ウェビング
	F	<ul style="list-style-type: none"> ・小グループ協議 ・発散技法(ブレインストーミング) ・強制連想法(マトリクス法、SWOT分析) ・収束技法(KJ法、ウェビング法、クロス法、概念化シート、特性要因図) ・ビデオ活用 ・参観シート
	G	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋の分類 ・ロジックツリー ・ホワイトボード活用 ・KJ法 ・模造紙の利用
	H	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボード活用 ・バズセッション ・付箋の利用 ・KJ法
進行役の役割	A	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究会の方法やルールを明確に伝達 ・全員の意見を尊重 ・参加者の発言をありのままに受容 ・キーワードを聴き取り、図で表記
	D・E・F	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーター（聞き役、促し役に徹する）
その他	G	<ul style="list-style-type: none"> ・共有化に向けて、廊下へ掲示
	H	<ul style="list-style-type: none"> ・共有化に向けて、ネットの掲示板機能の活用 ・研修だよりを活用

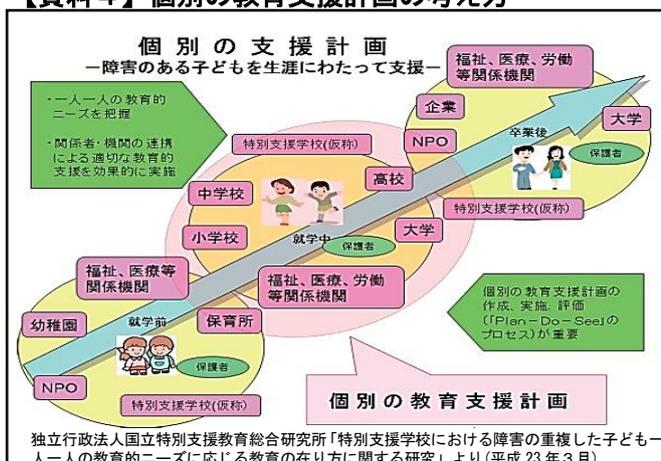
(2) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画と豊かなスポーツライフとの関連性

豊かなスポーツライフを実現するためには、運動そのものに興味をもったり、体育学習の楽しさを感じたりすることが必要である。

そのために、個別の指導計画を用いて、一人一人の学びを確かなものにし、個に応じた「わかる」「できる」「かかわる」ことができる学習を展開することが大切となる。また、運動を「する」ことだけの視点で捉えるのではなく、「みる」「支える」「知る」などの活動を通して、

スポーツとの多様な関わり方を指導していくことは、全ての児童生徒が運動に関わるきっかけとなることが期待される。個別の教育支援計画は、関係者や関係機関との連携という横軸に、生涯という縦軸を関連づけながら支援をつないでいくことが大切となる（【資料4】参照）。さらに、個別の教育支援計画には、児童生徒及び保護者の思いや願いなどの生きがいづくりにつながり縦軸の支援の重要な視点となる項目が記載されている。これらのことから、個別の教育支援計画等の考え方や内容が、豊かなスポーツライフにつながる学習を計画する上で、関連性のある情報になる。

【資料4】個別の教育支援計画の考え方



そこで、本研究では、個別の教育支援計画等を活用した授業づくりが、生涯学習への意欲の向上やスポーツとの多様な関わり方、運動の楽しさに触れることなどの体育学習の充実や豊かなスポーツライフにつながるものと捉えた。

(3) 県内の知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校を対象としたアンケート調査

ア アンケート調査の概要

(7) 目的

知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校の体育の時間における、個別の教育支援計画等の活用状況と教科会に関する実態を把握する。

(4) 対象

宮崎県内の知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校の小学部、中学部、高等部（本校7校、分校2校の25学部）である。

(6) 調査内容と実施時期

体育の授業計画段階における個別の教育支援計画等の活用状況と、教科会の在り方に関する質問を13項目で構成している。調査は、令和元年7月に実施した。

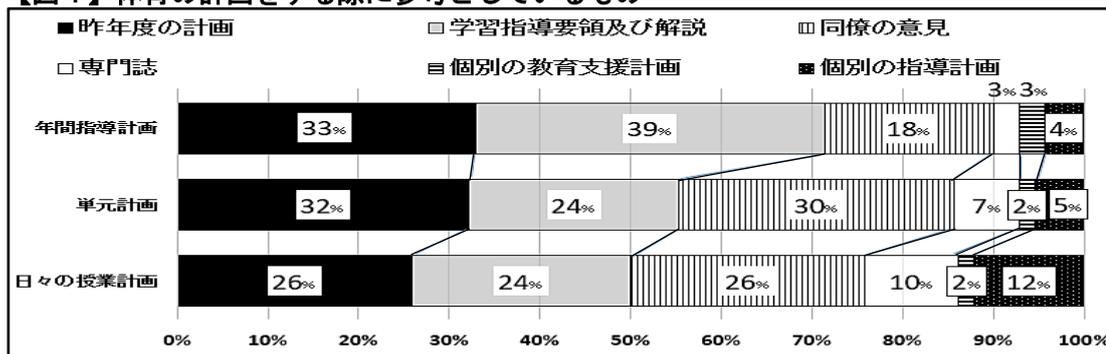
(5) 有効回答数

有効回答は、25学部の全てが有効であった。

イ アンケート結果

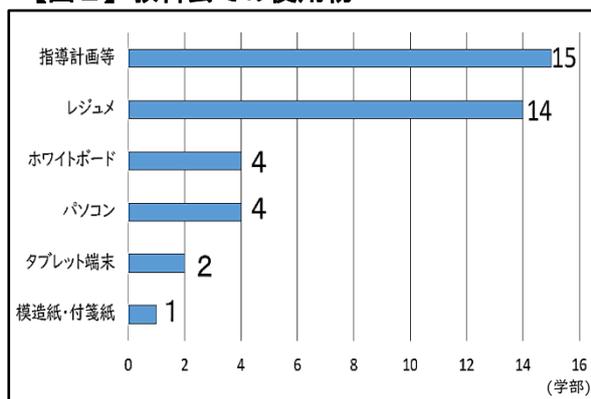
【図1】は、「体育の計画をする際に参考としているもの」についてのアンケート結果である。個別の教育支援計画の活用は、どの授業計画の作成段階においても約2%であった。個別の指導計画の活用は、年間指導計画から日々の授業計画へとなるにつれ活用の増加が見られた。

【図1】体育の計画をする際に参考としているもの



【図2】は、「教科会での使用物」に関するアンケート結果である。実際に、教科会に個別の教育支援計画等を使用している学部はなかった。その他の結果として、25 学部中の 23 学部（92%）で教科会（体育授業に関する話し合い）が設定されていた。また、「情報共有の在り方について」の自由記述での回答では、「教科会で使用した資料」や「会議録」、「口頭での説明」によるものが多く挙げられ、「校内支援システムを利用したショートメール」での共有方法も見られた。

【図2】教科会での使用物



2 実践研究

(1) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画と教科会を活用した授業づくり

授業づくりは、研究協力校である都城きりしま支援学校中学部第2学年（生徒数 18 名：通常学級 16 名、重複障がい学級 2 名）の教科別の指導における体育の時間で実施した。教科会で授業の計画と検討をし、それを基に検証授業を行った。

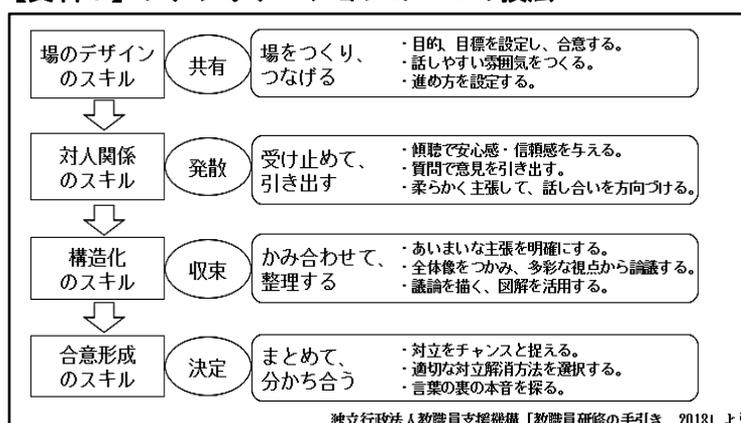
本研究における個別の教育支援計画等を活用した授業づくりのイメージを【図3】のようにまとめた。授業の計画段階から個別の教育支援計画等を活用して、単元の設定や指導の手立て等を作成していく。

【図3】個別の教育支援計画等を活用した授業づくりのイメージ図



【図3】のとおり、本研究における授業づくりについて、既存の教科会を活用し、授業を実践していく。これまで授業計画案を検討する場であった教科会から、授業計画案を作成する場として設定する。その際、教科会を活性化するために、【資料5】のファシリテーションの技法等を用いて進めていく。

【資料5】ファシリテーションの4つの技法



独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き 2018」より

(2) 検証 1

ア 教科会の実践

先行研究の「共通理解のための時間の確保」が必要であるという情報や92%の学部が教科会を設定しているという結果を踏まえ、既存の教科会を活用することにした。

(7) 本時における教科会の目的

本人及び保護者の思いや願い、体育で身に付けさせたい力の共通理解を図り、個別の教育支援計画等を活用して単元を計画する。

(イ) 実施期日及び時間と授業開始日

7月24日と25日にそれぞれ50分間で実施した。授業開始日は9月4日であった。

(ウ) 参加者

研究実践校の中学部職員5名（保健体育免許の保有者）

(エ) 準備物

個別の教育支援計画、個別の指導計画、付箋紙、学習指導要領解説等

(オ) 研究員の立場

参加者の意見を引き出し、全員が決定事項に合意できるようにファシリテーターとして参加する。

(カ) 教科会の支援の手立てと活動の様子

検証1の教科会は夏期休業中に実施した。研究員が教科会の進行を行い、個別の教育支援計画等を活用した教科会を2回実施した。1回目の教科会は、保護者のニーズと中学部の体育が身に付けさせたい力について、ブレインストーミングやKJ法を用いて共通理解を図った。2回目の教科会は、9月に実施される授業（球技）について、生徒及び保護者のニーズ等を踏まえながら、学習内容の検討を行った。以下の【表2】は、教科会の主な支援の手立てとその時の活動の様子等をまとめたものである。

【表2】教科会の支援の手立てと活動の様子と参加者の感想

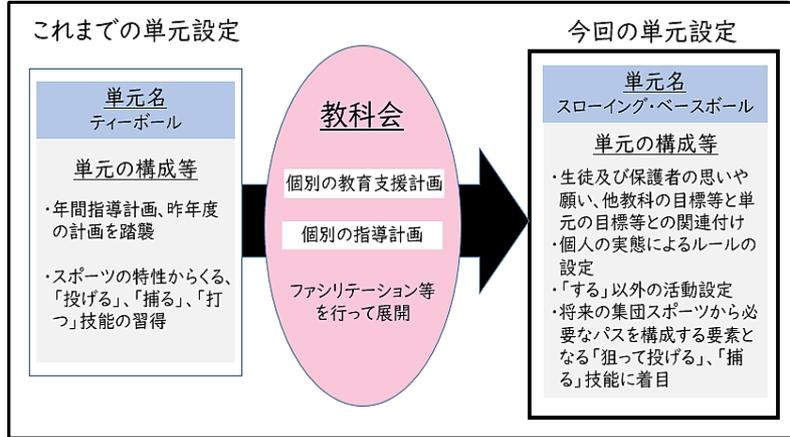
支援の手立て	
<ul style="list-style-type: none">個別の教育支援計画等をすぐに確認できるように手元に置いた。個別の教育支援計画で生徒及び保護者の思いや願い、個別の指導計画の各教科等の課題や手立てを共通理解した。全員が納得できるように、合意形成を促すためのファシリテーションを取り入れた。意見を出しやすく、協議を行い易くするために、付箋紙を用いて個人で思考する場面を設けた。また、ブレインストーミング、KJ法を活用した。意見のずれをなくすために、教科会の目標をホワイトボードに掲示し、教科会の開始時に確認した。考えや議論を視覚化するために、ホワイトボードや模造紙を利用した（【写真1】参照）。教科会に参加していない教師との共通理解のため、職員室へ教科会で記録されたホワイトボードの結果を掲示した（【写真2】参照）。	<p>【写真1】</p>  <p>【写真2】</p>  <p>職員室 へ掲示</p>
活動の様子	
<ul style="list-style-type: none">個別の教育支援計画等を見て、体育に生かせる項目を自立活動の手立てを中心に探していた。生徒の名前が頻繁に出されて、個別の指導計画を見ながら具体的な手立てに対する意見が活発に出されていた。	

参加者の感想	
・	個別の指導計画に参考になるものが意外とある。
・	他教科の個別の指導計画はなかなか見ない。
・	もっと授業で活用できるように分かりやすく書いてあると良い。

(キ) 個別の教育支援計画等を活用した単元設定

右の【図4】は、教科会の意見を基に作成した単元設定へのイメージ図である。前年度の計画の踏襲ではなく、これまでの視点に生徒及び保護者の思いや願いを踏まえ、単元を設定した。

【図4】 検証授業Ⅰにおける単元設定へのイメージ図



(ク) 実態に応じたルール設定

「投げる」「捕る」の技能について、個別の指導計画を用いながら、話し合った。【表3】のように、ボールを捕る意識を高めるために、生徒の実態に応じたルールを設定した。それらが達成されることで得点が与えられるようにした。

【表3】 個別の指導計画を活用したルール設定

グループ	捕るルール (最終の判断は審判が行う)
I	・ ノーバウンドで捕る。 ・ 動きながら、ある程度強いボールをワンバウンドで捕る。
II	・ ワンバウンドのボールを捕る。速いワンバウンドボールを捕る。 ・ ボールを手や足で止める。 ・ ボールを捕りに行き、さわる。
III	・ ボールを目で追い、ボールを追いかけて捕る。

(ケ) 個別の教育支援計画等の活用を明確にした指導案の作成

指導案を作成するにあたり、【資料6】のとおり「体育学習に関する個別の教育支援計画等との関連」という項目を設けた。これまでは、生徒の実態と単元の目標を関連させて個人目標を設定していた。今回は、本項目を設けることで、他教科等(特に自立活動)の目標とも関連付けられている個人目標であることを、指導案を通して、授業に関わる教師と情報共有を図った。

【資料6】 検証授業Ⅰにおける個別の教育支援計画等を活用した個人目標

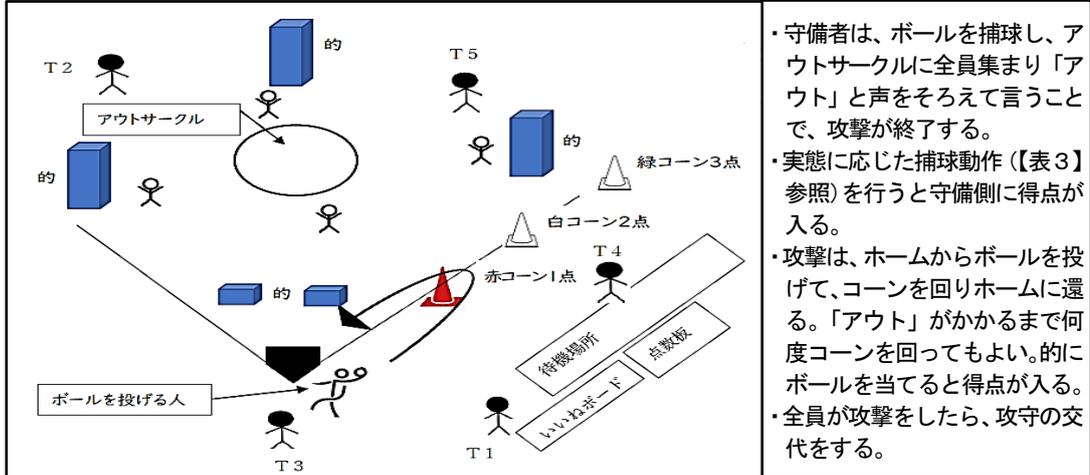
(2) 生徒の実態及び個人目標		個人目標の設定	
氏名	性別	生徒の実態	個人目標
A	男	・ 運動技術が高く、遠い的に向かって投げることができる。捕る動作でも遠い距離でもノーバウンドで捕ることができる。 ・ 友達への関わりは消極的で、教師に促されることで言葉掛けをすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保護者の願い <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しく学校生活を送ってほしい。 ○ 長期目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団生活において適切な行動の仕方を身に付ける。 ○ 自立活動の目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団での活動に自分から参加。 ・ 他者の気持ちを推測する。
B	女	・ 自分から話をしたりすることはほとんどみられない。友達と協力した活動を頼まれても反応を示さないときもある。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本人の思いや願い <ul style="list-style-type: none"> ・ 走りたい。 ○ 保護者の願い <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達とトラブルなく、仲良く過ごしてほしい。 ○ 長期目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師や他の生徒の話を注視して聞き、適切に行動することができる。

イ 検証授業の実践

(7) 授業の概要

単元名は、「スローイング・ベースボール」(全7時間)である。集団スポーツで必要となるパスの技能につながる「投げる・捕る動作の習得」と、「協力」を組み合わせで設定した。主なルールは【図5】のとおりである。

【図5】「スローイング・ベースボール」の主なルール



(4) 授業の実際

本時は、9月27日に実施し、全7時間のうちの6時間目にあたる。生徒は、これまで投げる・捕る動作の習得に向けた学習を進めてきた。その学習として、3人組でボールを投げる人、捕る人、タブレット端末で動作を撮る人に分かれ、役割を交代しながら、技能の習得を目指すと同時に、運動をするだけではなく「みる」、友達に「教える」ことを行った。また、友達の動きを意識的に「みる」ために、活動中の良いプレーや友達からの言葉かけに対して「いいねカード」を貼る活動を学習の終末段階に行った。さらに、自分たちでMVP賞(一生懸命動いている友達やチームメイトにアドバイスや優しい言葉かけをしている友達など)を選ぶ活動も行ってきた。【表4】は、本時の生徒と教師の様子である。

【表4】本時における生徒・教師の様子

生徒の様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達に狙う的をアドバイスする姿(【写真3】参照)や得点係などを主体的に行っていた。 ・ 的に狙って投げようとしたりボールを捕ろうとボールに向かって動いたりするなど、意欲的に動いていた。 ・ 友達に走るコーンの色を教えたり、アウトになった生徒に対して「ドンマイ・ドンマイ」と声をかけたりしていた。 ・ 笑顔が見られ楽しみながら活動していた。 ・ 「いいねシール」を用いて、友達の応援やアドバイス等の良かった姿を思い出し、友達を称賛していた。(【写真4】参照)。「〇〇君の一生懸命声を出しているところが良かった。」と発表していた。 	<p>【写真3】</p> <p>【写真4】</p>
教師の様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒だけでなく、教師も「応援」や「協力」、「アドバイス」などの項目別のMVP賞を選び、授業のまとめではその項目にそって評価や言葉かけがあった。 ・ ゲームを進行する教師、チームの応援を支える教師など、役割分担が明確になり、ボールを保持していない生徒にも称賛していた。 	

(3) 検証2

検証2の実施時期は、年間指導計画において陸上運動の長距離走が位置付けられていた。検証1は、生徒の実態等からのボトムアップ的な話し合いに議論が集中してしまったという反省を受け、単元の目標について教科会の参加者全員で合意形成を図り、授業づくりを実施した。

ア 教科会の実践

(7) 本時の教科会の目標

個別の教育支援計画等を用いて、長距離走の単元目標を設定して指導の方向性を定める。

(イ) 実施期日及び時間と授業開始日

9月27日に、50分間で実施した。授業開始日は10月28日であった。

(ウ) 参加者

研究実践校の中学部職員5名（保健体育免許の保有者）

(エ) 準備物

個別の教育支援計画、個別の指導計画、付箋紙、模造紙、検証Iの単元目標等

(オ) 研究員の立場

参加者の意見を引き出し、全員が決定事項に合意できるようにファシリテーターとして参加する。

(カ) 教科会の支援の手立てと活動の様子

検証2の教科会の支援の手立てについては、【資料7】の実施計画（四角囲みは実施後の意見を挿入）に沿って実施した。合意形成の前に、個々の考えをもたせるために、個人の考えをまとめる時間をとった。その後、ペアから全体へまとめていく過程を経た。

【表5】は、その時の教科会の活動の様子と参加者の感想をまとめたものである。

【資料7】教科会の実施計画の一部

教科会実施計画		
1 目的 個別の教育支援計画等を活用した教科会を実施し、豊かなスポーツライフにつなげる授業をすることができる。		
【ファシリテーションの技法】 ①目的・目標を設定し合意する。②話しやすい雰囲気をつくる。③進め方を設定する。④傾聴で安心感・信頼感を与える。⑤質問で意見を引き出す。⑥柔らかに主張して、話し合いを方向付ける。⑦あいまいな主張を明確にする。⑧全体像をつかみ、多彩な視点から議論する。⑨議論を描く。図解を活用する。⑩対立をチャンスと捉える。⑪適切な対立解消法を選択する。⑫言葉の奥の本音を探る。		
2 指導計画		
時間	活動内容	支援の手立て(①から⑫の数字は、上記のファシリテーションの技法)
	(事前準備)	○ 個別の教育支援計画等を準備しておく。 ○ ロの字型から空間のない場に設定しておく。② ○ タイムスケジュールをホワイトボードに示しておく。③
2分	1 本会の目的や目標を確認する。	○ 目標をホワイトボードに掲示し、確認する。① 「個別の教育支援計画等を用いて、長距離走の単元の目標を決めよう。」
5分	2 確認をする。 ・ ルールの確認 ・ 学習指導要領の目標 ・ 本人及び保護者の思いや願い	○ 「質より量」、「批判禁止」、「自由奔放」、「便乗歓迎」の話し合いのルールを掲示し、確認する。② ○ 学習指導要領、本人及び保護者の思いや願いを確認する。 ○ 記入してあるタイムスケジュールを確認する。③
8分	3 単元の目標を設定する。 (1) 個人で思考ひろげる。	○ 検証Iの単元目標を参考にして、目標を設定させる。 ○ 合意形成サイクル(個人思考→ペアでの意見交換→全体での共有のサイクル)を用いて意見を出す。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 付箋紙を用いて個人の意見をできるだけ引き出す。 ○ 時間がある人には、グルーピングできるものまとめておくように伝える。(KJ法) ○ 質問には丁寧に答える。④ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>【付箋に書かれた意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペース配分 ・簡単な目標設定をクリアする ・腕振り ・テンポ・走るフォーム ・自分の意志で目的地まで進む ・協力して走る ・一定のペースで走る ・呼吸法 ・自分の力で走る ・自己記録に挑戦する等 </div>
10分	(2) ペアで意見交換をする。 ・自分の考えた意見をペアで共有しながら、意見をまとめていく。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 付箋紙を用いて、グルーピングを行う。(KJ法) ○ グルーピングの際に、理由を伝えたり、相手に質問したりすることで意見の共有を図るように伝える。⑤ ○ 言葉だけでなく、動作や図などで示しても良いことを伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>【出された質問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テンポってどういう意味? ・自分の力で走るとってどういうこと? </div>
15分	(3) 全体で意見をまとめる。 ・各ペアでどのような意見交換が行われたのか出し合う。(各3分) ・質疑を行い、方向性を定める。(9分)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話のポイントを復唱したり、意見を取り入れて言い直したりして、確認しながら進めていく。⑦ ○ 質問を掘り下げて、本人の意見を引き出す。⑫ ○ 意見がまとまらないときには、図で示したり⑨、正解はないことを伝えたりしながら、みんなが納得して決めたものであればよいことを再度確認する。⑥ ○ 対立した意見が出た時には、どちらかに決めるといふことより新たな意見を引き出すことにも意識する。⑩⑪ ○ 本時の目標を確認しながら、必要な領域を網羅しているか問いかける。⑧ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>【出された意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が楽しめるためには、これまでの自己記録に挑戦するだけでは難しい。 ・走り方の指導が十分でなかった ・苦手な生徒も楽しめる内容の設定が必要である 等 </div>

【表5】教科会の活動の様子

活動の様子	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒たちの長距離走に対する興味・関心を確認することができ、苦手な生徒が長距離走に楽しめるための目標を考えていた。 ・ 個人での思考する時間を設けることで、自分の考えをまとめ付箋に書き、ペアで意見交換をする際に意見が活発に出されていた（[写真5]参照）。 ・ ペアや全体での意見交換では、ホワイトボード等にかいたり、貼ったりしながら意見をまとめていた（[写真6]参照）。 	<p>[写真5]</p>  <p>[写真6]</p> 
参加者の感想	
<ul style="list-style-type: none"> ・ これまで長距離走の目標を具体的に見直してこなかったことがわかった。 ・ 運動のできる生徒の目標は、すぐに思い浮かんできた。 ・ みんなで取り組める、楽しい長距離走を作りたい。 	

(※) 個別の教育支援計画等を活用した単元設定

教科会で、【資料8】の単元目標を設定した。このような目標の基、楽しさを感じるための技能面の向上と協力する態度の育成を目指した学習活動を2つ設定した。1つ目は「ラン・ラン チャレンジタイム」と称し、音楽や友達に合わせてグループで走る活動である。2つ目は「ラン・ラン 玉入れ」とし、スタート地点にあるカゴから15mほど離れた所にあるおじゃみを時間内に往復して入れる活動である。

【資料8】本時の単元目標

<p>2 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 腕振りのリズムや自分に合ったフォームなどの走り方のポイントがわかったりできたりし、友達との活動を通して、自他の心身の状態や自分に合ったペース、運動との多様な関わり方を知り、陸上運動の楽しさを味わうことができる。(知識及び技能) ○ 自分に合った走り方のポイントやペースを考え、友達と協力して練習の方法や自他の心身の状態を友達や教師へ伝えたり聞いたりすることができる。(思考力・判断力・表現力等) ○ 陸上運動に進んで取組、ルールやマナーを守り、互いに協力して練習や発表会の運営を行うことができる。(学びに向かう力・人間性等)
--

(7) 実態に応じた支援方法の設定

時間などの抽象的な概念が定着していない生徒に対し、音楽を手掛かりとした。また、自立活動の目標を参考に、コミュニケーションについて記載のある生徒に対し、それらの課題が意識しやすいグループ編成を行った。

(7) 個別の教育支援計画等の活用をより明確にした指導案の作成

本人の思いや願いが曖昧な場合に、担任が生徒から聞き取りを行い、本人の思いや願いを明確にし、【資料9】のように個人目標設定に活用した。

【資料9】個別の教育支援計画等と個人目標との関係性

<p>初めの本人の願いは、「ハリーポッターに会いたい」であった。担任が聞き取ることで、「先生たちをびっくりさせた。」さらに「認めてほしい。」というニーズがあった。この情報を担任と教科担当者で共通理解した。</p>	<p>生徒の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 運動に意欲的に取り組むことができる。背筋を伸ばして走るなどが難しい。 ・ 人とペースを合わせることができるようになってきた。(日常生活の指導での朝の活動より) ・ 自分の思っていることをすぐに言葉にしてしまうことがある。大きな声で応援することができる。 ・ 体育は好きであるが、走ることや長距離走の抵抗感が強い。 	<p>体育学習に関する個別の教育支援計画等との関連</p> <p>本人の思いや願い <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の好きな活動でみんなから認めてもらいたい。 </p> <p>長期目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーション能力の向上。 </p> <p>自立活動の目標 <ul style="list-style-type: none"> ○ 他者の発言を受け止めることができる。 ○ 自分や友達の良さに気付く。友達と行動を合わせる。 </p>	<p>個人の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 走り方のポイントの一つ選び、教師の言葉かけを受け、試しながら走る事ができる。 ・ グループの友達の動きを見て、前の人を抜かずに走ることができる。 ・ 友達の頑張っているところを見付け、応援して楽しむことができる。
	<p>学習活動場面で本人のがんばりを褒めるよう、教科担当者間で共通理解した。</p>		

イ 検証授業の実践

(7) 検証授業の概要

単元名は、「ラン・ラン ランニング」(全13時間)である。本単元は、個別の教育支援計画の生徒及び保護者の思いや願いを踏まえて、友達と協力しながら、長距離走の楽しさを味わわせることをねらいとしている。内容の構成としては、「ラン・ラン フェスティバル」を目指して、目標設定タイムにグループで挑戦させる「ラン・ラン チャレンジタイム」とゲーム性のある「ラン・ラン 玉入れ」の2つの活動である。明確な目標設定やグループ活動、ゲーム性のある活動を通して、苦手意識の高い生徒が、長距離走に親しみながら活動できるように配慮した単元である。

(7) 授業の実際

本時は、11月11日に実施し、全13時間のうちの4時間目にあたる。生徒は、1時間目にオリエンテーション、2・3時間目に、「ラン・ラン チャレンジタイム」を実施してきた。ルールの理解や音楽に合わせるペースを掴むことが難しい様子も見られた。走っている様子をグループの担当教師に撮ってもらい、走り方にも注目させるようにした。

【表6】は、本時における生徒と教師の様子をまとめたものである。

【表 6】 本時における生徒と教師の様子

生徒の様子	
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の中には、友達の様子を気かけながら走っていた（[写真 7]参照）。 長距離走を苦手としていた生徒が、音楽のリズムに合わせて体を動かし笑顔で走ったり、自分から希望してグループの先頭を走ったりするなど、意欲的に取り組んでいた。 一人ではすぐにペースを落としてしまう生徒が、友達に合わせて走っていた。 ゆっくり走ることやタブレット端末を活用したことで走り方を意識したり、課題を見付けたりしていた（[写真 8]参照）。 	<p>[写真 7]</p>  <p>[写真 8]</p> 
教師の様子	
<ul style="list-style-type: none"> 教科会で共通理解した目標に沿った教師の言葉かけがあった。 各グループに教科会に参加した教師とそうでない教師とを配置した。技能面や授業に関する事を、お互いに確認し合っていた。 	

3 結果

(1) 教師のアンケート結果

教科会に参加した教師 4 名に対して、教科会と授業等に関するアンケートを 7 月と 11 月に実施した。質問項目数は、事前調査が 14 項目、事後調査が 15 項目であった。

教科会に関する質問では、事前事後ともに、「意見を出しやすい雰囲気である」と全員が回答した。また、教科会に参加していない教師との情報共有は全員が「必要である」と回答した。「実際に情報共有をしているか」の質問に対し、事前では、半数が「どちらかといえば思う」、残りの半数が「思わない」と回答した。事後では、半数が「どちらかといえば思う」、残りの半数が「どちらかといえば思わない」と回答した。以下の【表 7】は、「教科会を行った感想」の回答の一部である。

【表 7】 教師の事後アンケート結果の一部

今回の教科会を行った感想（自由記述）
<ul style="list-style-type: none"> T 1 以外の先生と指導の方向性、学習内容、支援などを個別の指導・支援計画から話すことができ、大切なことだと思った。 誰が T 1 になっても同じような授業ができ、何かしらの形で T 1 が代わっても、問題ないと思った。他の教師と内容のやり取りができるようになった。 単元ごとに目標や実態について話すこと、グループ編成や目標の共通理解は大事だと思った。 個別の指導計画に参考となるものがいろいろとあった。

個別の教育支援計画等を活用した授業づくりに関する質問では、授業を計画する際に個別の教育支援計画等を活用することの重要性は理解しつつも、活用していなかったことがわかった。事後調査では、「今後も個別の教育支援計画等を活用したいか」の問いに全員が「そう思う」と回答し、体育以外の授業づくりにも全員が「活用したい」と回答した。以下の【表 8】は、「授業を行った感想」の回答の一部である。

【表8】教師の事後アンケート結果の一部

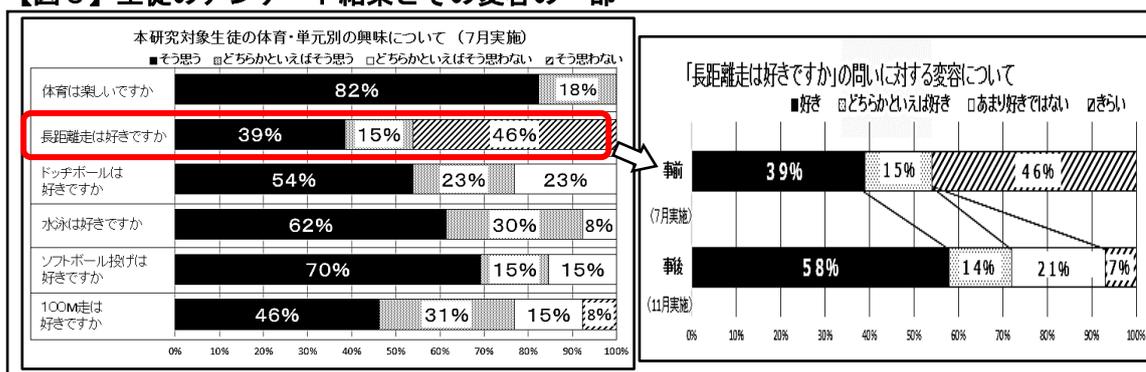
今回の授業を行った感想（自由記述）	
・	重複障がい学級の生徒に対する手立てが難しいと感じた。また、どうしても授業では担任等が対応することになるので、教科担としての関わりも課題だと感じた。
・	生徒一人一人が、楽しそうに参加できていた。自分たちで振り返って課題を見付けるなどグループでの活動が積極的になった。体育科以外の先生も協力的だった。
・	これまでT1に任せて指示を受けて動くことも多かった。教科会で目標をみんなで決めたことで生徒への言葉かけの基準もはっきりしたと感じた。
・	技能面が高くない生徒へ意識的に言葉かけを行った。
・	子供たちの将来像や興味関心を生かした教材の工夫を行うことで意欲的に取り組み、子供たちが楽しむ姿を見ることができた。手立てや目標の立て方が参考になった。
・	教師間のチームワークがよくなった。T3へゲーム進行の役割を預ける、T1が生徒の様子などの全体的な把握をするなどの役割が分担できた。

(2) 生徒のアンケート結果

研究対象校の中学部第2学年の生徒18名に対して、体育授業に関する事前アンケート調査を7月に、事後アンケート調査を9月(検証I)と11月(検証II)に実施した。質問項目数は、事前調査が6項目、事後調査が7項目であった。

【図6】【資料10】は、生徒のアンケート結果の一部である。

【図6】生徒のアンケート結果とその変容の一部



【資料10】生徒のアンケート結果における自由記述の一部

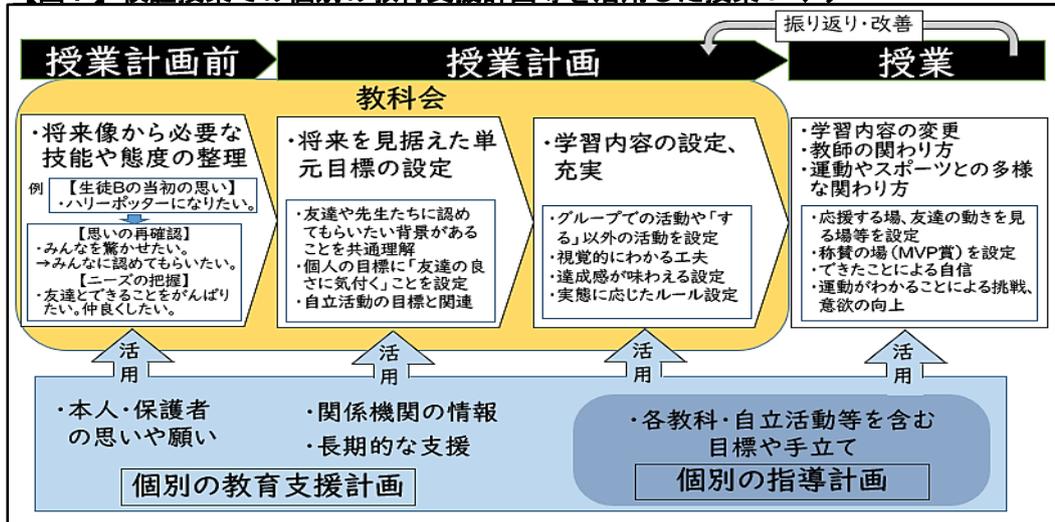
スローイング・ベースボールの授業の感想を書いてください。(9月実施)	
生徒	感想
A	ボールを投げるのが楽しかったです。
B	ダンボールをあてられるようになりました。
C	みんなとゆうえんたのしかったです。
D	みんなのようすなところが見れてよかった。
E	みんなできえうりやくで楽しかったです。
F	友達と協力することや、ちがてきえるようになりました。とても友達とよくこぼるんじがたのしかったです。
ラン・ラン ランニングの授業の感想を書いてください。(11月実施)	
生徒	感想
A	おれもたちとよくはしゃぐことがたのしかったです。
B	おとがくとおなせいベースではしゃげるようになりました。
C	1人1人がよく走り回ることがたのしかったです。
D	友達とのベースにおおせいのかわぶずがたのしかったです。
E	できるよくなりました。みんなのおかげです。

その他のアンケート結果として、「体育の授業は楽しいですか」と「友達を応援することは好きですか」に対する回答は、いずれも高い数値を示すも、事前と事後に大きな変化は見られなかった。

(3) 個別の教育支援計画等と教科会を活用した授業づくり

【図3】を基にして、個別の教育支援計画等を活用した授業づくりを進める上で、ニーズの聞き取りなどを加えることもあった。検証授業で実施した主な手立て等について、以下の【図7】のようにまとめた。

【図7】 検証授業での個別の教育支援計画等を活用した授業づくり



また、検証の前と後における教科会の内容等の変化を【表9】のようにまとめた。

教科会が授業計画の検討の場から作成の場になり、検討事項についても、支援の手厚さに加え、指導の方向性について話し合われた。また、生徒の実態については、個別の教育支援計画等の客観的な情報が加わった。さらに、特定の人意見に偏りがちとなる話し合いが、全員で意見交換を行い、納得して進めることができた。

【表9】 検証の前後における教科会の内容等の変化

	実施前	実施後
授業計画について	・ 担当者が教科会までに指導計画案を作成し、教科会で検討する。	・ 個別の教育支援計画等の生徒及び保護者の願いを反映し、教科会の参加者全員で意見を出し合い、計画案を作成した。
検討事項について	・ 指導・支援の内容・方法やグルーピング、安全管理などの授業内容に関することが中心であった。	・ 単元目標を個別の教育支援計画を用いて、全員で設定した。 ・ 学習内容やそのための支援の方法を個別の指導計画を用いて、全員で考えた。
生徒の実態について	・ 担当していない児童生徒の実態は、同僚による伝聞になり、個別の指導計画等の目標が何であるかは十分に共通理解されない。	・ 個別の教育支援計画と個別の指導計画を手元に置き、他教科等(特に自立活動)の目標や手立てを確認しながら、関連を図った。
話し合いの様子について	・ 担当者の作成を汲み大幅な変更の意見は発言しにくい。在職年数の長い教師の意見や過去の学習等が反映されやすいこともある。講師だけの教科会の構成メンバーの年は、前年度の計画から大幅な変更ができなかった。	・ 進行は、ファシリテーションの技法を用いて進め、参加者全員で意見を出し合い、納得(合意形成)しながら計画を作成していた。 ・ 個別の教育支援計画等を実際に見ながら、話し合っていた。
先行研究について	・ 共通理解を図るための時間の確保が必要である。また、共通理解のためには、効率的な打合せが大切となる。	・ 先行研究の課題を解決するために、既存の教科会を活用し、ファシリテーションの技法等を用いることで効率化を図った。

4 考察

(1) 個別の教育支援計画等の活用の仕方

本研究では、授業づくりの中心に教科会を位置付け、授業の計画段階から個別の教育支援計画等の活用を試みた。

個別の教育支援計画の活用としては、授業計画前に、個別の教育支援計画等の本人や保護者の思いや願いをKJ法等により共通理解を図り、現段階において必要となる技能や態度を整理した。次に、授業計画の段階では、それらの情報を踏まえた単元の目標等の設定や、医療機関との連携に関する項目を活用した運動時の安全管理や配慮について共通理解を図った。

個別の指導計画の活用の仕方については、他教科等の目標や手立てを参考にしながら、個人の目標設定や生徒の支援方法、教材の工夫を行った。

これまでの授業計画は、生徒の実態と前年度の計画等を基に授業内容が作られていた。一

木ら(2010年)によると、特別支援学校では、前年度の目標や評価の背景や根拠が把握できずに次の目標の方向性が見えないために前年度を踏襲した指導に陥りやすいことを指摘している。今回の検証授業における学習内容では、個別の教育支援計画を活用することで「ティーボール」から「スローイング・ベースボール」、「長距離走」から「ラン・ラン ランニング」と大きく変わり、結果として体育における運動への多様な関わり方(「する」「みる」「支える」「知る」)を授業内容に位置付けることができた。また、長距離走が好きな生徒の割合が増えたこと、「みんなと応援できて楽しかった」等のアンケート結果から、個別の教育支援計画等を活用したことで、新たな計画や運動との多様な関わりが見られる学習活動を展開することができたと考える。

担当者全員で目標を設定する過程で、目標だけでなく指導観そのものが共有されていき、言葉かけ等が目標に沿ったものに統一され、教師の指導や支援の方法にも改善が見られた。教師対象の事後のアンケートからも「言葉かけの基準がはっきりした。」等の肯定的な意見が聞かれ、個別の教育支援計画等を活用して目標を設定していくことが、T・Tを円滑に進めらるうえでも意義があると言える。

一方で、個別の教育支援計画に書かれた教育的ニーズに関する情報が充分ではなく、本人及び保護者の思いや願いについて詳しく聞き取りを行うことが必要であった。また、聞き取りを行う中で、作成時点から生徒の思いや願いが変化していることもあった。このことから、より具体的に情報を収集することや、個別の教育支援計画等を適宜見直ししていくことが必要である。さらに、「家庭と教育と福祉の連携『トライアングル』プロジェクト報告」(2018年)を踏まえて、学校教育法施行規則の一部が改正され、個別の教育支援計画を関係機関と連携して作成することが示された。今後は、関係機関と連携した個別の教育支援計画の作成のために、豊かなスポーツライフなどの生きがいつくりの視点を加えた関係機関との連携づくりの在り方や個別の教育支援計画等の様式の在り方についても、探っていくことが課題である。

(2) 教科会の在り方

福山(2017年)は、共通理解の困難性の原因として、「打合せ時間の確保」を示し、窪田ら(2016年)は、個別の教育支援計画を授業で活用するために「効率的な打合せ」が必要だとしている。そこで、既存の教科会が効率的な会となるために、話し合いのルールやゴールを明確に示し、意見の出しやすい雰囲気づくりや協議をする視点を定めた。また、付箋紙やKJ法などを用いて意見を発散・収束する等、ファシリテーションの技法に加えて、個別の教育支援計画等を手元に置き、いつでも確認できるように配慮した。

これらの対応により、生徒の将来像や実態に対する支援方法等について具体的な意見が活発に出され、事後のアンケート結果からも、話し合いの過程において個別の教育支援計画等が参考になったという回答を得た。教科会で個別の教育支援計画等を活用したことが、授業場面において生徒の思いを反映した言葉かけ等の変容につながったことから、萩庭(2017年)の言う、「個別の教育支援計画等が教師間の連携ツールとしての可能性」を見出すことができたのではないかと推察する。

また、独立行政法人教職員支援機構の「教職員研修の手引き 2018」の示す、活性化されたチームづくりのポイントである、チームに貢献する「主体性」が発揮され、新たなアイデアや力が生まれる「相互作用」が見られたことから、ファシリテーションにより教科会を活性化することができたのではないかと推察する。

さらに、教科会を授業計画の検討の場から作成の場へと位置付けたことにより、担当者が授業計画を一人で作成していたものが、全員で合意形成を図りながら授業の計画を立てることができた。「これまでT1の指示に任せて動くことも多かった」、「教師間のチームワークが良くなった」等の教師のアンケート結果からも、教科会で授業を計画することが、教師間の連携をより高める授業づくりの在り方として有効であるのではないかと推察する。

今回の教科会は、授業計画を作成することに焦点を当てたものであった。授業後のプロセスについては、日常場面で情報交換により、授業計画の修正を行ってきた。しかし、授業後の生徒の変容や課題を個別の教育支援計画等へ反映するまでには至らなかった。特別支援学校学習指導要領解説総則編(平成30年)では、個別の教育支援計画等はPDCAのサイクルにおいて、適宜評価を行い、指導目標等を改善してより効果的な指導を行う必要があることを示している。このことから、本研究の成果を踏まえ、個別の教育支援計画等の見直しに教科会での情報を活用していく必要がある。また、本研究では、体育での授業づくりを進めてきた。みやぎ特別支援教育推進プランの「文化・芸術・スポーツを通じた障がいのある子どもの生きがいつくり」を考えた際に、全ての教育活動において、個別の教育支援計画等を活用した授業づくりが大切になることから、他教科等でも本研究での取組に汎用性があるか検証していく必要がある。

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 個別の教育支援計画等を活用した教科会を行うことで、豊かなスポーツライフと授業内容が関連付けられ、体育学習における「する」「みる」「支える」「知る」授業を構成することができた。
- (2) 授業を計画する段階から教科会の参加者全員で検討したことは、教師の共通理解をより深め、T・Tによる協力体制の高まりにつながった。
- (3) 教科会において、個別の教育支援計画等を活用したことやファシリテーションの技法を用いたことにより、議論の方向性が定まり、教科会の活性化を図ることができた。

2 今後の課題

- (1) 個別の教育支援計画等を活用した授業を行うためには、個別の教育支援計画の中に、生徒が目指す姿を具体的に書き込むなど生きがいつくりの視点を加え、活用につながる様式や活用の方法をさらに検討していく必要がある。
- (2) 本研究の授業づくりについては、作成から実施までのプロセスの在り方を中心に取扱い、今後は、実施後の個別の教育支援計画等の加筆修正なども含め、PDCAサイクルの中での教科会の在り方についても検討が必要である。
- (3) 本研究は、教科別の指導である体育の授業での取組であったが、他教科等や他学部においても、本研究の取組に汎用性があるか検証する必要がある。

〈参考・引用文献等〉

- 「個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究（最終報告）」
 (2016年 窪田朗子・羽賀晃代 神奈川県立総合教育センター)
- 「特別支援学校(肢体不自由)における自立活動を主として指導する教育課程に関する基礎的研究
 -教師の描く指導の展望に着目して-」
 (2010年 一木薫・安藤隆男 障害科学研究)
- 「特別支援学校における『個別の指導計画』の運用及び活用実態と課題」
 (2016年 佐々木全 岩手大学)
- 「特別支援学校(知的障害)に在籍する 自閉症のある幼児児童生徒の実態の把握と指導に関する研究
 -目標のつながりを重視した指導の検討- (平成28年度~29年度)」
 (2018年 柳澤亜希子 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所)
- 「特別支援教育におけるチーム・ティーチングに関する一考察-知的障害特別支援学校におけるチーム・
 ティーチングの長所項目表とATの支援評価表作成を通して-」
 (2018年 福山恵美子 大阪総合保育大学)
- 「校内研修の活性化に関する研究 一人一人の教員が主体的に取り組み校内研修の在り方-合意形成を図るための
 コミュニケーションを活用する研修の工夫-」
 (2008年 静岡県総合教育センター)
- 「個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用」
 (2017年 萩庭圭子 東洋館出版)
- 「特別支援教育『連携づくり』ファシリテーション」
 (2007年 三田地真実 金子書房)
- 「障害者基本計画(第4次)」
 (平成30年 内閣府)
- 「特別支援学校 幼稚園教育要領 小学部・中学部学習指導要領」
 (平成29年 文部科学省)

《研究実践校》 宮崎県立都城きりしま支援学校